静岡県博物館協会会報
№78

静岡の博物館

「龍潭寺　下貼り文書解体整理」（文化財を守る会）

静岡県博物館協会

平成28年度　第１回講習会
新規・リニューアル館の視察（東部）

日　時：平成28年10月19日(水)　10：00～17：00

場　所：三島市郷土資料館、かんなみ仏の里美術館、富士山かぐや姫ミュージアム（富士市立博物館）

参加者：26名

内　容：近年リニューアルおよび新設された博物館･美術館の視察

高度成長期以降、博物館園が数多く建設されたが、30年以上が経過し設備更新の時期が近づいた施設も多い。また、阪神淡路大震災や東日本大震災を経て、耐震基準の見直しや災害対策への対応も迫られている。博物館園への財源が減少する中で、いかに施設を維持し、現代のニーズに合った事業活動を行えるかが多くの館園の重要な課題となっている。今回の講習会では耐震工事とリニューアルを同時に行った２館、および文化財を後世に残すため新しく新設された１館を視察した。

1971年に開館した三島市郷土資料館では、2010年10月から耐震補強工事と館内のリニューアルが行われた。はじめ新館建設の構想もあったが、「郷土愛を育む」という基本方針をそのままに耐震補強とリニューアルへ変更した。耐震工事によって壁が厚くなり、収蔵庫や展示室が少しずつ狭くなったことなど、工事に携わった学芸員による貴重な情報も伺った。リニューアル後は、展示室の一部に机を設けるなど、体験学習を重視した展示が行われ、一貫した運営のコンセプトが垣間見えた。

かんなみ仏の里美術館は、地域で守られてきた仏像の寄贈を受け2012年４月に開館した。建築家の栗生明氏設計による建築は地域のお堂のような落ち着いた佇まいである。館内は主に資料展示室と仏像展示室の２棟に分かれており、説明を行う空間と仏像に向き合う空間がゾーニングされている。ボランティアの方が解説を行うなど、地域に根差した美術館というコンセプトが明確となっており、小ぶりながら充実した鑑賞体験を得られる工夫が随所に見られた。

1981年に開館した富士市立博物館は、2007年に耐震計画が策定され、2013年の富士山世界遺産登録に合わせて展示リニューアルの詳細設計と耐震補強の実施設計が作成された。2015年５月より休館工事に着手、2016年４月に富士山かぐや姫ミュージアムの愛称のもとリニューアルオープンした。富士市のオリジナリティを強調する「かぐや姫」の名のもとコンセプトを明確にし、また映像装置などを活用することで教育普及機能を拡充する展示を生み出している。２階の旧収蔵庫を展示室にリニューアルし、園路に続く２階

出入口を新設することで、動線に一貫した流れが生まれていた。

リニューアルおよび新設の３館を視察して感じたのは、それぞれの博物館園が自らの存在意義や目的をしっかりと問い直しているということである。そうして中長期的なヴィジョンを持つことが有意義なリニューアルに繋がっている。次世代へ文化を引き継ぐ使命を持つ博物館園にとって長期的な施設維持は必須課題であり、先行事例に学ぶことは多い。

（公益財団法人上原美術館・上原近代美術館　土森智典）

体験学習用机を設置した三島市郷土資料館の展示室

かんなみ仏の里美術館の資料展示室における
館長による解説

教育普及機能が拡充された
富士山かぐや姫ミュージアム１Ｆのようす

最新の映像装置を使用した
富士市かぐや姫ミュージアムの展示室

平成28年度　第２回講習会
博物館園の虫カビ対策について　～IPM、燻蒸、その他～

日　　時：平成29年１月27日（金）　10：30～16：00

場　　所：静岡県立美術館講座室、エントランスホール

参　加　者：35名

日程・内容：11：00　開会

11：10　「IPM に基づく生物被害防除」

講　師：岩田泰幸氏（公益財団法人文化財虫菌害研究所　研究員）

13：10　「生物被害と IPM 並びに虫・カビの被害と殺虫・殺カビ処理剤の選択について」

講　師：薮本学氏（日本液炭株式会社　ガス営業部長）

講　師：芳村健治氏（日本液炭株式会社　開発部長）

14：10　「近現代美術作品のための予防保存活動」

講師：相澤邦彦氏（兵庫県立美術館　保存・修復グループ学芸員）

15：15　関連団体・業者による情報提供（於：エントランスホール）

協　力：イカリ消毒（株）、エア・ウォーター（株）、（一財）環境文化創造研究所、関東港業（株）、光明理化学工業（株）、（株）資料保存器材、東海埠頭（株）、日本液炭（株）　（五十音順）

国内の博物館や美術館では、気候の変動や天災、施設の老朽化などから、指定品を含む博物館資料を守るための仕組み作りや連携、調査、研究などについて、行政や NPO を含む多岐に渡る分野で同様の課題意識を持つ周到な取組みが目立つようになった。博物館活動に、資料を守る高い意識と国際的なルールを基にした資料の移動、展示、管理・保管が学芸員の活動および研鑽に求められているのである。

資料の保存を考える時、非常に重要なのが、防虫防菌対策である。かつて我が国では、臭化メチル製剤（商品名エキボン）による、定期的な大規模燻蒸が主流であった。殺虫殺カビが可能なこの薬剤を使い、年に１回程度、資料をまとめて燻蒸しておく、というやり方が、国内では当たり前に見られる光景だったのである。

だが我が国は、「オゾン層の保護のためのウィーン条約」締約国であり、条約に基づいて開催された平成９（1997）年のモントリオール議定書締約国会議において、臭化メチルはオゾン層を破壊する物質として、平成17（2005）年１月以降全廃が決定された。これにより、エキボンを使うことは出来なくなってしまった。また、大規模燻蒸のように大量の薬剤を必要以上に使うことに対しての批判も、高まっていた。このため、対応策として浮上したのが、IPM（総合的有害生物管理 Integrated Pest Management）である。文化財 IPM の考え方は、１．館園の建物において考えられる有効で適切な技術を合理的に組み合

わせて使用する、2．資料の管理される場所では、文化財害虫がいないことと、カビによる目に見える被害がないことを目指す、3．建物内の有害生物を制御し、その水準を維持することである。つまり駆除や処置対策から未然に防ぐ予防対策であって、予防対策とは、日常・定期の点検管理をシステム化すること、併せて、専門家の技能と適性な薬剤を使用することである。

そして臭化メチルの全廃に後押しされ、化学物質の使用に対する懸念から、IPM とは、燻蒸処理や薬剤を使用しない防除法だという誤解が生まれてしまった。だが日本特有の「高湿度気候」では、カビや虫の発生を根本的に防ぐことは難しい。紙や木などによる絵画・書籍等の文化財は、カビや虫の発生源であり、文化財保護には、燻蒸が不可欠である。生物被害については被害の拡大を防ぎ、二次被害が起きる前に適切な薬剤を使用して、防除が必要なのである。

こうした現状を念頭においた第 2 回講習会は、日常の博物館活動に直結する虫やカビの対策について近年の動向を学んだ。かつての大規模燻蒸の様子や IPM について、改めて確認すると共に、博物館資料に被害が出た場合の重要な燻蒸処理について幅広く学ぶ機会となった。

（東海大学海洋学部博物館　伊藤芳英）

岩田泰幸氏による講座

薮本学氏・芳村健治氏による講座

相澤邦彦氏による講座

各種関連団体による情報提供